

# 茶の間

## 人物

信三	お友	母親	荻島
つとめ人	信三の妻	お友の母	つとめ人

室生犀星

茶の間。長火鉢の上に電燈が下つてゐる。鐵瓶の湯氣が上つてゐるが既う宵の程が過ぎてゐるやうな物靜かさである。子供のおもちやが次の間へ通ふ暖簾の裾に散らかつてゐる。上手に斜に北國の町家らしい蔀戸が下りてゐて、橋のない溝の上に春さむい雪がゆつたりと降つてゐる。まだ肉體的にも若いお友が長火鉢の前に坐つてゐる。左手に階段がある。

お友（縫物の針を運ばせながら低いこゑで暖簾の垂れてゐる方へ向いて云ふ）熱はまだあるやうですか。夕方には七度八分くらゐに下つてゐたんですけれど：

母（姿は見えない）ないやうだね。それによく睡てゐるやうだよ、そこからも鼾が聞えはしないかね、ほら、ね、鼻も先刻の吸入が利いたのか本統にこころもちよささうにすうすう通るやうになつたやうだ。吸入つてよく利くものらしいね。

お友（耳を澄ます。そして微かな愛情めいた微笑みを漏らす）ええ、吸入をかけてようございましてね、でも、あんなにいやがるものだから、つい可哀さうな氣がしましてね。こんなに利くんだつたら少しくらゐむづかつたつて明日の朝もかけてやりませう。

母（しみじみと）それがいいね。わたしたちの子供時分はこんな吸入なんてものはなかつたものだよ、いま時の子供は何と云つてもいろいろ立派なお醫者さまの機械が揃つてゐるから仕合せなわけね。そのかはりむかしと違つてだんだん子供のからだが弱くなつたやうな氣がするね。お向ひだつておとなりのお子さんだつてみんな病弱よわよわしいんだから：

お友 (縫ひかがりを齒で切りながら) けれども家の子はまだ達者な方ですよ。この間も病院で三人のお子さんを連れてみんな交る交るの病室に臥てゐましてね。廊下でよく行き會ふもんですからつい挨拶をするやうになりましたが、その時もわたしのそばへ入らしつて、まあ、このお子さんは一體どこがおわるいんですかと、呆れたやうな顔貌でお仰有るんですもの、全くうちの子のやうない顔いろをしてゐる子供なんか、滅多に病院にはゐはしませんからね。

母 (話に身を入れ少し起き直つたやうな聲音で) そしてお前どう云つたの。

お友 (何となくうれしさに) わたし何んだかきまりがわるいやうな氣がしましてね、すこし風邪をひいたものでございますから大ごとになつては取り返しがつかないと思つて、まあ云つて見れば病氣の先廻りをして診せにまゐつたんでございますと云つたら、その奥さんが心から感心したやうな調子で、ええ、その方がいいんですよ、少しくらゐの風邪でも打つちやつとくよりか、軽い間になほして置けばあとあとが清々しますから。わたしのやうに三人とも入院してゐた日には、まるで子供の看護に生れたやうなものですよ、と、ほんとにお氣の毒でした。ずゐぶん寢れてゐらしつたやうですよ。

母 お可哀さうにね、しかしそれも矢張り何か業のやうなものね。そんなに三人の子供がみんな病院に入つてゐるなんて、よくよくの不仕合せな方だね。(年寄りらしく) そんな人はやはり前世がよくないんだよ。

お友 (すこし笑つて) そんな前世なんてものはあるもんですか。

母 誰にだつてあるものだよ、お前なんか前世は善光寺さまの牛だつて云ふんだもの。うそならお臀の左に縄ずれのあざがあるのを見てごらん。わたしも始めはうそだと思つてゐたらちやんとあるんだもの。

お友 (思ひあてて不愉快な顔をする) いやなことを云ふお母さんね。もうそんなことはこれから云はないでちやうだい。

母 :::::

お友 (間を置いて) 水枕はもういいでせうか。

母 さうだね。(間を置いて) だいぢよぶ。もうよほど下つてゐるやうだよ。つめたくなつてゐるから。

お友 さうですか。いいあんばいね。この様子だと明日は薬をのませなくともいいかも知れませぬね。

母 (睡さうに何か返辭をする)

お友 (縫ひものをつづける。縫ひものをしてゐる襟足をすぼめる。寒い凍て冴え返る音がする)  
母 (睡さうな聲で) 誰か来たやうぢないか。

お友 (耳を立てたが) 水甕のお餅の水を先刻かへておいたものですから、多分あれが凍るんでせう。それに今晚はよほど應へますね。人通りもあまりなくなつたやうですよ。

母 春さきになつてからきふに寒くなるのが、あるものさ、大寒よりか寒いことがね。

お友 (表に氣を配る。凍る音ばかりでないやうな氣がして表へ眼をやる) ……

母 信三はおそいね。

お友 ええ、それでも四五日中にはひまになるらしいんです。(しばらくして)お母さん、誰か入らしたやうですよ。

母 (ゐねむりらしく返辭がない)

お友 誰方か知ら。(中腰になる。そして耳を立てたが何となく顔色をかたくする)

客 (低いこゑで遠慮深げにいふ)ごめんなさい。

お友 はい、唯いま、…。(これも低いこゑで何故かひつそりと立ち上る)どなたでございませうか。(とおづおづ土間から中格子を引きながらいふ)中山はこちらでございませう。

客 僕です。荻島ですがおそくにあがつてすみません。もうおやすみになつてゐたんぢやありませんか。それならまた參つてもいいんです。近くまで來たものですから、ついお寄りしたくなつてあがつたんです。

お友 (しばらくその聲音に居竦められて佇つ。そして暖簾の方を眺める。母のいびきが聞える。

お友、何か考へあててきつぱりした表情になる。先刻からと違つたやうに活々する)まあ、こんなにおさむいのに、よく入らしてくださいましたのね。(部戸をひらく。そとにゆつたりした雪が暗に射したあかりに浮いて見える)どうぞおあがりください。こんなにおさむいのにまあ。

客 (自然に低い聲になる)みなさんおやすみですか。

お友 (客の忸れた聲に惹き入れられる) いましたがたまでお母さんが起きてみたんですけど、もう睡入り込んだらしいんでございます。

客 お子さんは？――

お友 もう寝みましたの。

客 ぢや、あの、なんですか、お友さん一人きりなんですか。

お友 ええ。でも、……(暖簾の方を見る) ひよつとしたら母は目をさましたかも知れません。そんなこと、どうでもいいんですけれど。(長火鉢の火を掻き立てる。「こん夜はなかなか應へますね。」と客が云つて手を翳す。そしてあたりを親しさうに見廻す)

客 この茶の間は全く久しぶりですね。しかし爐はもうつぶしてしまつたんですね。

お友 ええ。子供が落ちたりなんかするとわるいと云つて、疊をしいてしまひましたの。ほんとはあつた方がいいんですけれど。

客 子供は達者ですか。

お友 (客に馴れ懐しさうにする) ええ、まあ達者の方です。

客 けふ野村さんのところへ行つてお友さんがよくあそこへ遊びに行くことをきいたんです。おさらひによくゆくさうですね。

お友 (ややてれて) ええ、おけいこの道なものですから、ついおうかがひしてゐますの。

客 野村さんで此間も女の人で僕のことをよく知つてゐる方が、一度ぜひお逢ひしたいつて傳言

されてゐたんです。野村さんは初めお友さんだといふことをハツキリ云つてくれないで、なんでも僕が野村さんに行つたらあそこのうちでは、すぐお友さんに電話をかけ呼びよせると云つてゐたんですが、こちらでそんな古い知り合ひもなし：：若しかと思つて見たものの、やはり氣がつかなくつたんです。(客、露骨に) お友さんは野村さんに若し僕がたづねて來たら、ぜひ一度來るやうに頼んだのですか。

お友 (赧らんだがきつぱりと) ええ、そんなふう云つたかも知れません。(微笑つて) でも、お電話は野村さんが自分で考へ出してかけようとしていらつしたのでせう。しかしよく入らつしつてくださいましたのね。

客 僕も一度お逢ひしたいと思つてゐただけれど、逢つても仕方のないやうな氣がしてね。何から云つていいか分らないやうな氣もちでね。

お友 (茶を淹れながら俯向きがちになり) ええ、そりやさうですけれど：：こちらへ入らつしたことは大ぶさきから知つてゐたんですし、それにあの綾子さんに此間途中でおあひしたときに、あの方がお宅へおうかがひしたつてさう云つてゐらつしやいましたの。だから綾さんさへおうかがひしてゐるなら、わたしだつておたづねしたつてかまはないと考へてゐたんですけれど、つい、ぐつぐづしてゐましたの。でも綾さんもずゐぶんかはりましたね。おかしのやうなお嬢さんめいたところがすつかりなくなりましたのね。

客 (をかしさうに思ひ出して) この間突然に訪ねて來ましてね。ちよつと喫驚したんです。で

も、すぐ顔をみるなり綾さんだと思ひましたよ。かはつてゐても何處かにかはらないところがありますからね。ところがあのひとときたら最う世帯の話ばかりし出してね。何んでも満洲の方の旦那さんからの毎月の仕送りを少しづつ貯めて、着物や帯を買った話ばかりだったが、それを妙に僕にほめてもらひたいやうな風でしたよ。

お友 まあ、そんな人になつてしまつたのか知ら。けれどもまだお美しいぢやありませんか。

客 ええ、まだ子供のときの顔かたちが、そっくり残つてゐますね。鼻つきなんぞまるでおかしのとほりですね。しかし妙に寔れてさむさうだ。――縫物しごとをしてゐたらどう、僕にはかまはないで……。

お友 (一方に縫物を片づける) もうしなくてもいいんですの。でも野村さんにおたのみしておいて、ようございましたわ。でなきやお會ひできなかつたかも知れないんですもの。いつか夏のころお宅の前を通つたことがございましたけれど、お寄りしにくくつて素通りしたんですが、……いいお住居ですのね。

客 見晴は高臺だからいいんですけれど、冬はさむくていけないんです。(何となくお友の顔から眼を離す。――そしてふと勝手への開き戸を見つめる) まだ、あのままですね。いま見てもなかなかよくかいてあるな。これはお世辭ぢやないんです。

お友 (同じく開き戸に芝居繪の似顔をかいた交ぜ張りを見る) 張り代へようといつも思つてゐながら、まだあれきりになつてゐます。あんな繪を毎日タ々うつしてゐたところがほんとに暢氣

でしたわね。それでもあのころは繪具なんぞつかつて一生懸命でしたのよ。さう云へばあれを張つてゐたころは師走のころでしたのね。やはり霞か何かが裏戸を叩いてゐてびつくりしたわね。それに妙なことにはいつでもお目にかかる 때가冬が多うございますね。今夜も雪が降つてゐるし、全くふしぎなやうですね。

客 (思ひ出して) たしか十二月の十八日でした。お観音さまの日のやうだ。晩に山の上のお寺へ行つたら提灯に雪が吹きつけてゐましたね。あのときの御詠歌はいつでも耳についてゐるやうでよく思ひ出しますよ。

お友 (一時に考へあてたやうに) 歸りましてからわたしずるぶんお母さんから叱られたことを覚えてゐますの。あのころはひどい嘘をこしらへて出歩いたものですから：：しかし、あのころはようございましたのね。何んでもしたいことが工合よくできたんですもの。お母さんひとりさへ丸めてしまへばよかつたんですからね。

客 (皮肉に笑つて) いまぢやそれができないと云ふんですか。

お友 (しやんとして) ええ、それもさうですけれど、そんなうそなんぞつくこともございませんし、したくもございませんわ。

客 (さびしく平凡に) まだこちらへつとめてゐたころですから、もう十年くらゐになりますね。

お友 (考へて) ええ、大きい方が、七つになりますからね。早いものでございますのね。

客 男だつたかしら。

お友 ええ、男の子ですの。(暖簾の方で子供のむづかる聲がする。お友、それを聞きすまして起たなくともいいかどうか考へる。間もなく歇む) 昨日からすこし風邪氣味で熱があるものですか：：もう下りましたけれど。

客 それやよくないですね。おだいじになさい。

お友 たいしたことはないんです。お宅でも皆さまお達者ですか。

客 (眩しげに) みんな達者です。

(話やうやく絶えがちになる。二人とも話題に縊らうとして焦つてゐるが見つからないでじれじれした氣味になる。客は煙草ばかりふかしてゐる。お友、しきりに話題を求めてゐるため顔いろ硬くなる。)

お友 わたしほんとおあひしたので何だかぼかんとしてゐるくらゐなんです。おあひしない前は、やたらにどうしたらお目にかかれるかと、そればかり氣に病んでゐたんですけれど。

客 (ぼんやりと) 僕も一度くらゐ會つたらと思つてゐたんですが、會つてみると何も話すことがなささうですね。あんまりつまみどころがないやうな氣がしましてね。

お友 (同感する) ずるぶん貯めておいたお話があつたんですけれど。それにあなたもすつかり變りましたのね。もとはこんなに凝乎としてゐらつしやらなかつたんですもの。

客 (お友の眼を見入ったが物憂くその眼の鋭さを失ふ) さう云へばこんなに落着いてゐたことなんてなかつたやうだね。この家でお友さんを追ひ廻したことがあつた。

お友 (思ひ出して微笑ふ。しかしおあいそのやうに表べばかりの笑ひ) そしてお母さんによく見つけられましたのね。するとあなたは何時でもまるで走るやうにしてお歸りになつたのね。あとをも見ずにね。

客 (苦笑ひする) あのころはお友さんだつて最つと活潑で、そんなにちやんと坐つてなんかゐなかつた。よくお母さんの背後では舌を出したりしたいたづら者だつたんだが。

お友 (むしろ極りわるく) このごろになつて考へると、ひやひやするやうなことがありますの。だからお母さんが古いことを云ふと、わたし黙つてしまひますのよ。なんだか餘處事のやうな氣がしてならないんですもの。

客 子供のときの話はときとすると非常に不愉快になることがあるね。が、どうかするとまた興味深いこともあるんだが……。

(二人また黙つてゐる。客ややしばらくして立ちかける。お友、むしろ何氣なく客の立ちかけたのを眺め、べつに止めやうとはしない。)

客 だいぶ晚いやうですから、——お母さんによろしく云つてください。

お友 いろいろまだ話があつたんですけど、何日、お發ちになりますの。

客 日は決つてないんだが、四五日中なんです。また暫らく會へませんがお達者で、(客、あいそ笑ひをする)それから子供さんをお大切にね。

お友 (土間へ一緒に下りかけ、中格子戸から蔀戸の暗い方へ行きかけ)これで又十年くらゐ年始状もくださいませぬね。いつものやうにね。(やや皮肉なれど情のある聲)

客 その方がさつぱりしていいぢやありませんか。もうしんるゐ交際のやうなものだから。

お友 しんるゐ交際ですて、――

客 まあ、そんなものです。

(蔀戸に客が手をかけやうとすると、お友、蔀戸の上から押して見て黙つて笑ふ。客、それを知らずに蔀戸を開けやうとする。)

客 開かないやうだな。どうしたのか、ちよつと開けてください。

お友 (振り顧る客を見て笑ふ)開けてごらんなさい。

客 (氣がついて、お友の顔を見る。或る表情を感じる。しかしまるで巫山戯られたときのやうな感じ)だつて開かないぢやないですか、さう云はないで開けてください。れいの茶目が出たのね。やつと、いまごろにね。

お友 (手を退ける) ぢや、開けておあげしますわ。(戸が開く、白々と寸餘の雪が溝をひとすぢ  
黒くした外に續いてゐる)

客 どうもありがたう。や、雪がだいぶつもつてゐる。

お友 (もはや平常のやうになり表へ出て) いまごろの雪だから、すぐ消えますわ。

客 ぢや、さよなら。(帽子を脱り早足になり行く)

お友 さよなら。

(暫らく客を見送る。間もなく家の中に入り火鉢のわきに坐り、手を火に翳しながら一と  
ところを見入りながら茫然としてゐる。むしろ名状しがたい放心的な物佗びた姿。しかし  
刻々に何かを考へ當てるため鋭い姿になる。間もなく縫ひものを始める、やや暫らくして  
母親の聲がする。)

母 (睡いこゑで) つい、うとうととしてゐたが、誰か來てゐたやうぢやないか。それとも夢を見  
たのか知ら。信三はまだかへらない? —

お友 (齒ぎれよく) 誰も來はしないんですの。

母 (べつに疑はずに) さうかい、ぢや、わたし一足さきに二階でねますよ、信三はもうかへる時  
分だし……。

お友 (立ちかけて二階へ行きながら) どうぞ、——ぢあ、お床があつたまつてゐるかどうか見て  
來ませう、先刻、行火に火を入れて置いてたんですけれど。

母 大丈夫温かくなつてゐるでせう。(母親出て來る。長火鉢のところでは老人らしく淋しげに煙草  
を吸ふ。あくびを一つする)

お友 (二階から下りて來て) いい工合にはほかほかしてゐますよ。蜜柑をいつものやうに枕もと  
に置いておきました。こんどのは甘いんですよ。

母 ありがたう。夜中に目がさめると何も考へることがないもんだから、妙に口淋しい癖がつい  
てしまつてね、年とると矢張り口きたなくなる一方だよ、ほんとに氣をつけてくれてありがた  
う。子供の時はそんな子ぢやなかつただけけれど。

お友 亭主をもつてから違ふとおつしやるの。いやなお母さん。

母 (しみじみと胸にあるやうに) すぐお前はさう云ふけれど、そりやお前の變り方つてものは  
大へんなものだよ、しかしどこか他人行儀めいたところが出てくるのだけはいやだけれど：  
しかしよく氣をつけてくれるから感心だよ。

お友 (微笑びながら併しきつかりと、またいくらか優しく命令的に) おやすみなさい。

母 (ほくほくと) ねますとも、——お前も床に這入るといい。(階段を上る) 信三には何か温か  
いものを拵へておやり。

お友 ええ、——でも外で何か食べてかへるでせうから。

(子供泣く、お友暖簾のうちに入り、添へ乳をしてゐるらしく低い子守うたをうたふ。美しい聲。)

——(信三歸る。外套の雪を拂ひながら茶の間の上り口に置く。そして茶の間をひと眺めして、暖簾の内を見る。)

お友 おかへりなさいまし。そとは寒かつたでせう。

信三 このごろの雪はあつたかいよ。それに急いで歩くものだから、——(靴を脱ぐ)

お友 (暖簾の内から) ごはんおあがりになつたんですか。

信三 あ、濟んだ、お母さんは? ——

お友 いまし方まで起きてゐらしたんだけれど……

信三 さう、誰も來なかつたかい。(信三煙草に火を點ける)

お友 (やや間を置いて) 珍しいお客さまがありました。

信三 (長火鉢の吸殻をのぞき込みながら) 吸口をつけないで煙草を吸ふお客さまだね、へえ、誰か知ら、はいからな男らしいな。

お友 荻島さんですよ。

信三 荻島——聞いたことがあるやうだが、さう、さう、荻島庄平のことかい。

お友 ええ。

信三 あの男が晩に来るなんて、——（信三やや不愉快げな聲になる）お母さんが此間會つたか云つたが、僕も一度くらゐ會つておけばよかつた。何しろ名前ばかりで一度もお目にかつたことがないのだからな。それにお前の好きなひとだと云ふんだから。

お友 （黙つてゐる）

信三 まだ、こちらにゐるやうに云つてゐたかね。

お友 二三日中にお發ちになるやうに云つてゐらつしやいました。

信三 おいとま乞ひかね。

お友 そんなおつもりだつたのかも知れませんか。

信三 お母さんは起きてゐたのかい。

お友 いゝえ。

信三 おやすみになつてから？——

お友 ええ。（暖簾の内から胸を搔き合せながら出てくる）でも、わたし黙つてゐましたの。

信三 なぜ？

お友 べつに深い意味はなかつたんですけれど……お茶をいれませうか。

信三 （不愉快をまぎらせながら）いらぬ。しかし何だつて萩島はいまどきになつて遣つて來たんだらう。

お友 (平氣で) しばらく會はないつて云ふんで入らして下すつたのよ、べつに何も他に意味もない……。

信三 (刺立つて) 意味もない……。

お友 でも十二三年も入らつしやらなかつたんですもの、もともと、荻島さんとは親類同様なんですし……これまでもこちらへ入らつしつたことはあつたんでせうけれど、あなたに遠慮して入らつしやらなかつたんでせう。

信三 さうか。べつに遠慮なんかしなくともいゝんだがね。とにかく僕は、ばかに睡いんだ。

お友 床はあつたまつてゐますから、おやすみなさい。

信三 (立上りながら上着を脱ぐ) 古い男なんかが訪ねて來ても、大がいの場合は黙つてゐる方がいゝよ。

お友 (胴衣を手に取り黙つてゐる) ……。

信三 へいぜいから見ると少し元氣らしいね、荻島が來たせるかな。

お友 (やつと微笑ひながら) さうかも知れません。

信三 (少し覗き込むやうにして笑ふ) お前にもまだそんなしをらしい氣があるなんて、ちよつと可愛らしい氣がするよ。

お友 さうでせうか。

信三 さうとも、咎めるよりもしをらしさが先きに立つよ。

お友 (考へ込む) さうね、わたし自身でもそんな気がしますわ。それはさうと何か召しあがりませんか、何か温かいものでも? ——

信三 (先刻とは別な調子で) 何か食べるかな。(打解けて) まだ實は飯前なんだよ。

お友 (びつくりして) まあ、さうならさうと早くお仰有ればいいのに。何かこさへませう。

信三 腹の足しになれば何んだつていいんだよ。

お友 (いそいそと襷がけになり勝手へ行きながら振りかへり思ひなほして) うんと御馳走してあげますよ、通りまで行つて來ますから: :

信三 傘なしぢや寒いよ、だいぶ雪がつもつたから。

お友 (袖を胸に掻き合せ) 大丈夫ですわ。すこしくらゐの雪は? —— (蔀の外へ出て) まあ、た

いへんな雪よ、足駄が沈むくらゐなんですもの。いつの間にこんなに降つたのか知ら? ——

信三 (長火鉢にもたれ何か考へ込みながら佗びしげに云ふ) もう、そんなにつもつたかな。

お友 (やや遠いこゑで) すぐに來ますから。

(信三、長火鉢にかがんでゐる。何の音もない、——物憂いけはひで時計が十一時を打つ。

信三、思ひ出したやうに時計のねぢをかけ氣がついて暖簾の内をのぞき込んで止める) ——

(しばらくしてお友が歸つて來たらしく雪を拂ふけはひがする。蔀戸が開く。)

お友 (寒さうに袖を合せ) 大へんな雪ですよ。どうして今じぶんこんなに降るのか知ら？ 道  
路は歩けないくらゐなんですよ。

信三 さくらの咲く時分にもよく降ることがあるよ、ことに去年はつぐみの巣がだいぶ高いところにあつたつて山のものが云つてゐたから、まだ今年はこれくらゐでは済むまいよ。

お友 (皮包の草餅を出す：：) ぢあ、つぐみの巣が木の下の方にあつたら、その年はふらないんですよ。

信三 山のはみんな左う云つてゐる。小鳥なんてやつは伶俐だからな。雪のよけいに降る年は高いところに巣がまへするなんて、よく考へたものさ。

お友 (感心して) さうね。伶俐なんですネ。おひとつ、いかが。

信三 (つまんで頬張る) だが、また皮包みを押入れへ投り込んで、あとでお母さんに見つけられるとこまるよ。いつだつたかも叱られたぢやないか。

お友 (微笑ひ出して) まだ一しよになりたてでございましたね。でも、あんどきはお母さんに隠しておいたから、わるかつたんですよ。朝にでも氣をつけておけば皮包みを見つけられはしなかつたんですよ：：。

信三 (低いこゑで) でもお母さんもこのごろはよくなつたやうだね。以前のやうにやきもちを焼かなくなつたからね。

お友 (思ひめぐらす) ええ、さうよ、ほんとによくなつたのね。けれどもあの時分はおもしろか

つたやうな氣がしますわ。張り合ひがあるやうで今よりかいいやうな氣がするわ。

信三 ぢあ、いまはおもしろくないといふのかい。(微笑ふ)

お友 (さびしく笑ひ) おもしろくもをかしくもないのね。なんだかあんまり静かすぎるやうです。

信三 (平靜な戲談らしく) お前もさう思ふかい。ぢあ、せつかく荻島君にまで來てもらつた方が元氣になつていいぢあないか。

お友 (頭をふつて見せる) それも既う駄目。

信三 (顔を覗き込んで。惡氣なしに) なぜ? ——

お友 (事もないやうすで加之懐しげに) 何んとも思はないんですもの。あの方がおかへりになつてしまつて、あなたとかうしてお話してゐると、何んにも入らつしやらなかつた前のやうな氣がするんですもの。ほんたうよ。これだけはふしぎなやうね。

信三 (さういふこともあるかと感じ入り) さうかな。そんな氣になつてゆくものかな。

お友 (しばらく考へ込んでゐる。ややあつて) 男のひともやはりさうなんでせうねきつと。それともちがつてゐますか知ら?

信三 (苦笑ひしながらすぐにまじめになる) そんな簡單なわけにはゆかないよ。しかし結局はさうもなるがね。(考へ直して) やはりさうなるかな。しかしどこか女とちがつてゐるところがあるよ。説明しにくいところがあるがね。

お友 (ふと何かを考へ出し別に拘泥せず) このごろおあひになりました?――

信三 (にがい顔をする) しばらくあはないよ。そんなひまなんか今のところないからな。あはないことはお前もよく知つてゐるぢやないか。べつにあひたくもないんだよ。

お友 (きふに美しい眼をする) わたしその方と一ぺんあひたいと思つてゐるの。どんなひとですかしら。

信三 つまらないしやうばい人だよ。あはない方がいいのさ。

お友 (あつさりと無垢に) さうでせうか。

信三 さうさ。おれはちやんと此處のうちにあるんだからね。ね、おい。ふさいでゐるわけぢやないね。

お友 (まじめな顔つきではつきりと) いいえ、そんなこと氣になんかかけてゐないのよ。ただふいに思ひ出したからおたづねしたの。

信三 (安心して) さうかい。それならそれでいいが……。

(ふたりとも黙つて坐つてゐる。表に雪を拂ふ音がはたはたとする。ふたり目を表にそそぐ。)

お友 出前持がきたやうね。

信三　ちよつと出ておやり。雪でたいへんだらうから。溝に橋板がとれてみたから氣をつけないと危ないぜ。

お友　ええ、氣をつけてやるわ。

（お友、しとみ戸をあけに出る。信三、たばこをふかし長火鉢にもたれ表を見てゐる。）

お友　（やや遠いびつくりしたやうな聲音で。――）あぶないわ。どうしたの、臺のものを下に

おきなさいよ。まあ、あんたみたいな子供にそんな重いものを持つて出させるなんてね、：：：すこし考へなしの御主人ね。

出前持ち　（かじかんだこゑで）なに、かまはないんです。これくらゐの雪なんか：：：。

お友　ぢや、あたしそれを持つてあげるわ。指さきが凍ぢかんでゐるぢやないかね。

出前持ち　なに、かまはないんです。なれてゐますから。

お友　明日の朝取りにきてください。今晚はもうおそいから。

出前持ち　さよなら。

（信三、表の聲に氣を取られてゐる。藪の開いたところから雪が吹き込んでくる。：：：信三、もの佗びしげにあくびを一つする。）

お友 (出前の箱をさげながら) まだ十二三の子供なんですよ。可哀さうに。

信三 さうかい。しかし仕方がないよ。いちいちそんなものを哀れんでゐては、こちらで可哀さうな氣もちの種切れになるわけだから――。

お友 (皿、小鉢をならべ勝手から酒徳利を持つて來て爛をする) わたしけふ荻島さんとお話をしてゐて、あの方もお話がなくなつてゐらつしやるのを見てゐたら、なんだか氣の毒な氣がしましたの。

信三 (こともなく) それで二人で黙つてゐたのかい。

お友 ええ、對ひ合つてぼんやりしてゐましたの。でも、なにもお話することがないんですもの。

信三 その黙つてゐる間がいいんだよ。謂はばその間に兩方で考へてゐるものがおやすくないのさ。

お友 なんだか息づまりさうな氣がしてくるんですもの。わたし、ほんたうは早くおかへりになつてくださればいいと考へたくらゐですわ。ちよつとしたやけな氣になつてしまひましてね。

信三 (鋭い或る思わくに衝き當つて) お前の考へてゐることは矢張り荻島をきらひでない證據だよ。お前は素氣ないやうに見えてそれで左うでないんだからな。

お友 (銚子の酒をつぐ。信三、それを飲む) さうですかしら、わたし、あの方と七八つくらゐの時分からのおともだちですからね。

信三 (何か考へ) そんな友だちといふものは、ばあさんになつても、よく思ひ出すことがあるものださうだよ。——荻島の手紙はまだお前持つてゐた筈だ。あれをちよつと見せないか。

お友 (平氣で好意を交ぜ) ええ、お見せしてもようございます。けれども、既ういぢめるのはよして頂だい。

信三 (盃をあけ) わかつた。いぢめはしない。

お友 とにかく休ませうか。(美しい目をする)

信三 (立上りながら天井を見て) 明り取りがまだ開いてゐるぢやないか。どうりでひんやりすると思つた。(土間へ下りて繩を引く) 雪の重みがのしかかつてゐるね。閉まらない。

お友 (天井を見る。蒼白い雪あかりが顔へ落ちる) ぐつと引いてごらんなさいましな。

信三 (ちからを込め) これでいいかい。(明り取りの戸、閉づ。同時に雪のかたまりが土間へ落ちる) そとが明るいが月夜だね。

お友 え、さうかも知れません。

(お友。皿や小鉢のあと始末をする。消炭の壺に炭火を消す。信三、厠へ立つて行く。)

信三 だいぶ寒いな、寝ることにするかな……。

お友 お床がすつかりあつたまつてゐるでせうよ。そつとしてゐてください。いまよく寝てゐる

んですから。目をさますとこまりますから。

信三 (暖簾の内へ這入り) よく寝込んであるね。(間——) 熱もなささうだ。電燈あかりは点けないのか。

お友 (覗き込んで) だいぢやうぶ目をさまさないでせうから、つけて下さいな。

(電燈点く。暖簾の片しぼりにされたところから、炬燵の艶めいたふとんが見える。子供の寢床及びたんすのわきに人形などがある。)

信三 やはり女の子といふものはどこか寝てゐても可愛いものだね。兄の方はおとなみみたいな顔を  
をしてゐる：

お友 (鏡臺のそばで髪に手をやり夜更けの鏡の底をのぞき込む) ええ、あの子は血色がいいし  
兄よりも器量がようございますからね。——おねまきはあつたためであるんです：：(顔料の瓶か  
ら二三滴掌に垂らし顔にさつとこすり) いますぐ参りますわ。(しばらくそのまゝに音もない。  
お友の二の腕するどく夜更けの鏡の前でうごいてゐる。)

——幕——

底本 室生犀星全集 卷6

出版者 非凡閣

出版年月日 昭  
12